

第4代 JFSC 会長就任挨拶



平田 康夫(KDDI研究所)

- 1967年4月 国際電信電話株式会社(KDD)に入社、以来1989年1月に至るまで同研究所にて衛星通信の研究に従事。
- 1977年～79年 国際機関「インテルサット」(米国)へ出向
- 1981年～88年 KDD研究所 衛星通信研究室長
- 1994年6月 KDD取締役
- 2000年10月 KDD I株式会社 専務取締役
- 2003年6月 株式会社KDD I研究所 代表取締役会長
現在に至る

昨年12月に開催されたJFSCの総会において会長を仰せつかりました平田です。よろしくお願いいたします。まずは自己紹介を兼ねて、私と衛星通信との関わりについて少し述べさせていただきます。

子供のころから強く興味を持っていた宇宙、特にその利用に関わる研究ができる企業ということで、1967年にKDDに入社し、以来20余年にわたって、衛星通信、その中でもデジタル通信に関する研究開発に携わってきました。入社5年目で初めて研究成果を発表したのが1972年にワシントンDCで開催されたAIAA第4回通信衛星会議(CSSC)でした(当時は国際のIが付いていませんでした)。「A Study on Satellite Communication For Mobile」というタイトルで、デジタル通信方式の採用、16マルチビーム及びスイッチングマトリックスの衛星搭載を提案した論文で今でも大切に保管しています。30余年後に再度AIAAの活動に参加させていただくのも何かのご縁だと強く感じています。

私の研究活動は、衛星通信とともに歩み、衛星通信に育てられたようなものです。1963年11月23日我が国最初の宇宙通信実験が成功し、ケネディ暗殺のニュースが宇宙中継によってお茶の間に飛び込んできたのは、丁度大学祭の最中で、したたか痛飲した二日酔いの朝のことでした。ニュースの中身とともに宇宙利用技術の進歩の速さに衝撃を受けたのを忘れることができません。その翌年には、インテルサットが設立され、衛星通信は、国際通信を画期的に改善する長距離基幹伝送路として、華々しく商用デビューすることになりました。

忘れてはならないことは、当時、衛星通信のシンボルであった直径が20メートルを超えるパラボラアンテナや高性能な通信装置は、三菱電機やNECなど我が国の通信業界が世界をリードし、衛星通信の基礎を築いたという事実です。衛星そのものは米国の軍事技術

によるところが大きかったですが、世界中の地球局の大多数は我が国の優れた通信技術者が設計し建設したものです。その後、衛星通信は、1970年代から1980年代にかけて、通信手段が未整備な地域の通信インフラや大洋を航行する船舶に対する通信手段として、大いに活躍することになります。さらに1980年代に入り、我が国始め世界各国において衛星放送サービスが導入され今日の活況へとつながっていくことになります。

1990年以降、移動通信はじめ様々な通信や放送サービスにおいてデジタル化が進められていますが、衛星通信はまさにデジタル通信のパイオニアでもあります。衛星通信は、高品質化、経済的な通信システムの構築、通信容量の増大のためには効率の良い通信技術の採用が不可欠なシステムです。そのため、1960年代の後半、衛星通信の幕開け時代からいち早くデジタル通信技術の研究開発が進められました。ご存知のように、本JFSC初代会長の関本大先輩は、デジタル衛星通信技術の先駆者中の先駆者です。私自身も、1967年以来一貫してデジタル通信技術を衛星通信に適用するための研究開発に取り組み、インテルサットやインマルサットシステムのデジタル化にささやかなりとも貢献できたのではないかと自負しています。

最近、衛星通信に関わる研究開発は、少々元気がないような気がします。国際通信における広帯域伝送路の主役の座を光ファイバーに譲り、移動通信などについても地上系通信システムの補完という役回りになってきていますが、まだまだやるべきことは多々あると思います。衛星通信の広域性、同報性、耐災害性を活かした衛星放送、ナビゲーション、非常災害通信などの分野は、今後とも着実な発展が期待されます。また、通信と放送の融合で代表されるように、世はメディア・コンバージェンス、サービス・コンバージェンスの時代です。地上システムと衛星システムとを巧みに組み合わせた、両者の良いところ取りをした融合システム、融合サービスを考えていくことも大切です。また、諸先輩方が築かれ、培われた衛星通信に関わる技術を継承し、それを育て、他の通信分野に活かしていくことも我々の役目だと感じています。

今後微力ながら皆様とともに衛星通信ひいては情報通信の発展に尽力していきたいと思っています。宜しく願いいたします。